

## 故郷「千里山」の思い出

二十回生 和田 忠博

私の父昌博（本紙に連載された「千里山開発物語」の著者：和田昌允の実弟）は工学部電気工学科の出身であるが文章を書くことが好きで電力業界関係の冊子を中心に実に多数の随筆を書き残している。その中に千里山時代の思い出となる記述があったので、ここに掲載したいと思う。昭和30年1月～33年5月、父が関西電力の営業部長、神戸・大阪北の支店長を歴任した頃「営業マンの手帳」と題して業界紙「電力」に38回にわたって掲載された中の第28話（昭和32年5月掲載）で、締めくくりがご説教調になっているが全文をそのまま掲載したい。

### 営業マンの手帳 第二十八話

終戦後間もない頃、ダンスが非常に流行して、猫も杓子もダンスを習った時代があった。私の住んでいた大阪近郊の町にも、各所にダンス・クラブができた。ある日曜の朝、私が家庭菜園

の菜っ葉に肥をやっているところへ、近所の大學生が三人連れだつて、裏口から入つてきた。「おじさん、お早うございます。朝から精が出ますね……。」

私はこれらの大學生たちから、残念ながら「おじさん」と呼ばれていた。しかし「おじさん」にもいろいろあつて、若い仲間と喋つたり、遊んだりできる「おじさん」だった。

「おじさん、隣組でダンス・クラブを作ろうと思つてすけれど、入つて頂けませんか？——」

「おじさんをクラブの会長にして……。」

会長が気に入つたので、私は二つ返事で承知した。

「しかし、メンバーは揃うだろうか？女の子が集まらないと駄目だぜ……。」

「おじさん、大丈夫ですよ。KさんとNさんは確実ですし、隣組の奥さんも皆、入つて貰つてもりですよ……。Iさんの奥さん、それから、おばさんも……。」

家内が大学生に抱かれて踊るのはいやであるが、Kさんのような綺麗なお嬢さんや隣のIさ

んの奥さんと抱き合って踊るのは悪くないと思  
った。

「よし、それだけメンバーが揃ってれば、いい  
だろう。会場はどこにするかな？」

「おじさんの家を頼みますよ。おじさんの家には  
一〇畳の板間があるでしょう。一〇畳あれば  
十分踊れますよ」

これには私はギョツとしましたが、会長に奉  
られた手前、いやだとは言えない。

「どこかに、もっと大きい板間はないかな？」  
「いろいろ考えたんですよ。おじさんところの  
板間が一番大きいので、おじさんを会長にして、  
その代わりに会場はおじさんのところにしよう  
と決めました」

うまくしてやられたが、会長をやめたいとも  
言えないので私の家を会場にすることにした。

会場開きの日は朝から飾りつけに大騒ぎだっ  
た。万国旗や色モールを天井に張り巡らし、色  
提灯に電灯をつけたりして、ダンスホールらし  
くなった。

夕食を終わって、景気づけにダンス・レコー

ドを電蓄で一杯に鳴らしていると、ぞろぞろと  
近所の旦那や奥さん、お嬢さん、学生たちが集  
まってきた。

先生は大学生三人で、パートナーのお嬢さん  
たちと、まずエキジビションをやって見せる。  
それからフォックストロットの手ほどきを何も  
知らない私達にしてくれた。ひととおり覚えら  
れると、お嬢さんや奥さんと組んで踊るのであ  
る。

旦那の目の前で、奥さんと抱き合って踊るの  
は心臓ものだが、一度踊ってしまうとなんでも  
ないものである。Kさんのような綺麗なお嬢さ  
んと組んで踊るのは大変気持がよろしいと思っ  
ただけである。変な気持をおこすのはダンスを  
したことの無い人だけで、ダンスをした経験の  
ある者には

「そんな変な気持をおこす人の気が知れない。  
そんな人こそ気を変なのではないかしら……」  
と言いたいぐらいである。

ダンスという場を離れて隣の奥さんの手を握  
っても大変だろうが、ダンスをするという約束

の下では、旦那の目の前で隣の奥さんと抱き合  
ってもかまわない。お互い変な気持にならない  
ということ、考えてみると妙なものだ。その  
ために、ここはダンスをするところであるとい  
う観念を植え付ける雰囲気を作成することが必  
要である。提灯を吊り万国旗を飾る。婦人はイ  
ブニング・ドレスを着てハンケチを手にする。  
紳士も折り目正しい服装をして、ポケットから  
白いハンケチを覗かす。

そのような環境を作ることが必要だろう。

ロータリー・クラブでは、毎回必ず皆で揃っ  
て歌を歌う。春ならば「春が来た、春が来た」  
の歌や「春の小川はさらさら流る」の歌など、  
小学唱歌を、髭の社長さん、頭の禿げた紳士達、  
ロマンスグレイの先生が打ち揃って歌うのであ  
る。皆で歌を歌うということはお互いの心を和  
ませ、打ち解けた雰囲気を作成するものだ。

旧制の高等学校の同窓会などでは、寮歌をつぎ  
つぎに歌い白髪の老人まで感激の涙をにじませ  
るものである。寮歌を歌うのが楽しみで同窓会  
に出る人があるぐらいだ。

皆で揃って歌を歌うのはよいことだろうが、  
社長や重役が声を揃えて小学唱歌を歌うのはロ  
ータリー・クラブだからこそである。ロータリ  
ー・クラブでは正面に大きなクラブの旗を飾り、  
またテーブル毎に各地のロータリー・クラブの  
小旗を掲げる。和やかな雰囲気を作るためだろ  
う。

環境は人の心を奇妙に染めるものだ。

ダンス・クラブで男女が相抱いて踊り、ロー  
タリー・クラブでよい年の紳士が小学唱歌を歌  
うのも環境の然らしむるところである。

職場の環境をよくするのは理の当然というべ  
きだろう。カラー・コンディショニングが提唱  
され、壁の色や机・椅子などの什器類の色まで  
調和を考えて、作業能率を昂めた工場の話を開  
いたことがある。事務所にしても同じで、お客  
に好い感じをおこさせ、また働くものに明るい  
キビキビした動作で仕事をさせるために、事務  
所の環境を考えることが必要だろう。

工場では九時から作業開始ならば、九時まで

に作業服に着替えて所定の位置についている。流れ作業が始まると用便に立つことさえ困難なほど、仕事に追われる。

それに較べて事務所はのんびりしている。向かい合った席の者はひとしきり朝の挨拶を喋り合い、配られた茶を飲み、煙草を吸うのが普通である。アメリカでは事務室に煙草の灰皿を置かないところがあるし、机の配置を、課長を背に一方向きに並べたところがあるし、昼の休みでも一時五分前には席について一時になれば一斉に仕事を始める習慣がある。それは、丁度、工場労働者のしつけに似ている。

わが国の事務室の職場環境はその意味においてあまりにもだらしないと思う。事務労働者に工場労働者のしつけをつけることが必要だと思ふ。そのような職場の雰囲気はどうして作り上げるか、工夫をこらすべきだろう。そのために機械の導入と流れ作業の思想を注入しなければならぬ。  
(昭和三十三年五月)

### 和田昌博氏略歴

明治40年8月

京都市上京区丸太町に生まれる

昭和7年

京都一中、三高を経て京都帝国大学電気工学科卒業  
大阪市電気局入局、配電統合、電気事業再編成を経て

昭和26年5月  
昭和35年5月

関西電力勤務  
取締役就任、常務取締役、専務取締役を経て

昭和46年2月  
昭和46年3月  
昭和49年5月

取締役副社長就任  
(財)大阪科学技術センター会長兼務  
取締役副社長退任、技術最高顧問就任

昭和49年7月  
昭和58年2月

(財)関西電気保安協会理事長就任  
保安協会理事長・科学技術センター会長退任

昭和58年4月

逝去

### 叙位、叙勲、学位

昭和40年12月 工学博士の学位を母校より受ける  
昭和44年11月 藍綬褒章受章  
昭和52年11月 勲三等旭日中綬章受章  
昭和58年4月 従四位



当時のダンスパーティーのメンバーで京都保津川へピクニックした時の写真



当時の和田家の庭で 千里山幼稚園入園前の和田忠博(右)と千二小入学前の和田昌治(昌允の長男)(昭和17年3月頃)

このダンス・パーティーは、私が小学5年の頃から中学1年卒業まで(昭和2年〜25年)毎週土曜日の夜7時頃から2時間程度開催されていた。私はレコード係を引き受け、次はブルースと頼まれると「港の見える丘」「星の流れに」などの曲をかけていた。私が音楽好きになったのは、当時しばしば母に連れていってもらった

宝塚歌劇と共に、このダンス・パーティーの影響が大きかった物と考えている。クリスマスには近くの樅の木を切り、デコレーションを飾り、綿の雪を枝に敷きダンス、寸劇、飲食とオールナイトで楽しんだものである。夜に強い私の体質はこの頃に養われたのかもしれない。

パーティーが開催されて1年程度経過した頃、世話役代表のNさんが町のチンピラから呼び出され、パーティーの仲間に加えると強く要求される事態が生じた。当然、応じられる話ではないので、単身で断りに行き、両頬が腫れ上がる程の暴力を受けることとなった。数日経過後、お隣のIさんが千里山駅前警察を訪れ、所長に暴力事件の事後措置を尋ねた。「若い者同志のちよっとしたトラブルですよ」と取り合わない所長に、神戸地検検事の名刺を出し、「私はこういう者だが」と再度問いただしたところ、直ちにチンピラをひっぱってきて、かなりきついお灸をすえたようで、以後、神戸に転宅する昭和25年3月まで平穩に楽しくこのパーティーは続けられた。

千里山幼稚園入園直前の昭和17年3月から神戸の甲南中学1年終了の昭和25年3月までの8年間、戦中戦後の激動時代であったが、従兄弟の家（和田の老家）と庭続きの家に住み年令の近い従兄弟達と遊び回った千里山、6年間を楽しんだ千里第二小学校には故郷でしか味わうことの出来ない忘れたい数々の思い出があるが、ダンスパーティーの夜もその一つである。

編集部からもひとこと 二四回生 奥田 陽一

和田忠博さんの原稿を読ませて頂き、遠い昔の懐かしい思い出が蘇ってきましたので、ひとこと書かせて頂きます。千里山ではピアノ・お絵描き・お習字・日本舞踊などのお稽古事が盛んだったことは昔から知っておりましたが、戦後まもなくにダンスも盛んだったとは全く知らず驚きました。

私が昭和22年千二小へ入学してすぐに友達になつたのがここに出てくるIさんご夫婦の一粒種のI君でした。お稲荷さん下と上の噴水の先、

小一には結構遠い道程なのにお互いよく往き来をして遊んでおりました。上の噴水の周りで、鬼ごっこに夢中で噴水に落ちて、溺れることもなく、I君の家で下着類一切お借りしてそしらぬ顔で家に帰ったこともありました。母が学級懇談会でIさんの奥さまと親しくなり、帰ってくるなり「婦人雑誌の表紙に出てくるような綺麗な人やね」とため息をついていたのを覚えています。

当時も検事さんと言えば「怖い人」というイメージでしたが、ご主人はおとなしそうな感じの方で、「鬼検事」には見えず、黒い大きな鞆を小脇に抱えて、役所に通われるのによくお会いしました。

I君の家から植木の開いたところを抜けると和田忠博さんのお庭、当時珍しい坊ちゃん刈りのお兄ちゃんでした。庭続きの和田昌允（千里山人）さんのお宅には昌治さん、昌明さんのご兄弟がおられました。I君と一緒に3人のお兄ちゃんに、野球や当時珍しい鉄道模型を動かしたりして遊んでもらいました。

お父上が何をされてるかなど全く知らなかったし、父に和田さんのお宅で遊んだなど話しませんでした。その当時阪急に新入社された、橋本雅夫氏（阪急電車青春物語の著者）から、阪急で和田昌允さんが次長、私の父がその下の課長で机を並べていたことを教えてもらったのはその頃から50年以上経った今から10年ほど前、「千里山開発物語」原典のコピーを頂いた時でした。

ましてや忠博さんのお宅でダンス・パーティーが開かれ、Iさんご夫婦も出てられたなど、小学一年坊主には知るよしもありませんでした。今思えばIさんのお宅にも立派な電蓄がありました、遊んでいてレコードを聴いた覚えはないのですが、ワルツやブルースなどダンス音楽のレコードもお持ちだったのでしょうか。

昨年11月「ちさと会」に出るため千里山に行き懐かしい場所を訪ねました、和田さんのお宅は二軒とも新しく建て替えられていましたが、Iさん宅は6年以上前のままですが、どなたも住んでおられないようでした。